

令和 6 年 9 月 27 日現在

機関番号：14301

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K19675

研究課題名（和文）障害者から学ぶ“エイジング・イン・プレイス”の秘訣：ミクストメソッド研究

研究課題名（英文）The secret to "Aging in Place" learned from people with disabilities: Mixed method research

研究代表者

岩隈 美穂 (Miho, Iwakuma)

京都大学・医学研究科・准教授

研究者番号：60512481

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,500,000円

研究成果の概要（和文）：アンケート結果から、二次障害に対する知識は、「よく知らない」が45.7%、「二次障害があると思う」と回答した人は、52.1%であった。ピアサポートに関しては、求める情報の違いによって相談する相手を選択している可能性や、医療者とは違うピアに期待されている役割が考えられた。インタビュー調査では、「横のつながり」と「縦のつながり」が抽出され、ピアを通じて実践知を形成していた。エイジングプレイスの秘訣としては、介助してもらった経験を（障害を持つ前に）する、介助のされ方、介助者との付き合い方、「迷惑をかけない」教（健常者が持つ「迷惑をかける」ことへの恐れ・嫌悪感）に気づく、などのアドバイスが語られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本のみならず世界が高齢化へ向かっている中、これまでは「高齢期になって障害をもつ」人口（障がい高齢者）に注目がされがちだった。しかし医療技術の発達などから「障害を持ちながら高齢期を迎える人たち」（高齢障がい者）も増えてきている。近年、エイジングプレイスという言葉が使われるようになったが、その言葉が作られる前から、障害があっても地域で暮らす人たちは、「要介護状態になっても地域で豊かに暮らす」工夫を重ねている。彼ら・彼女たちからエイジングプレイスの秘訣を学び、社会のリソースとすることが本研究の社会的意義といえる。

研究成果の概要（英文）：The results of the questionnaire showed that 45.7% of respondents said they did not know much about secondary disabilities, and 52.1% responded that they thought they had a secondary disability. Regarding peer support, it is possible that people choose who they consult with depending on the information they seek, and that peers are expected to play a different role than medical professionals. In the interview study, "horizontal connections" and "vertical connections" were extracted, and practical knowledge was formed through peers. The secret to an aging place given by people with disabilities who have lived in communities is to have the experience of receiving assistance (before you become disabled), how to receive assistance, how to interact with the caregiver, and awareness towards "not cause trouble" fear that the non-disabled have.

研究分野：ヘルスコミュニケーション

キーワード：障がい者 高齢化 エイジングプレイス ピアサポート

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

・インターネットを使う障がい者は年々増えており、利用目的としては、「知りたいことを調べるため」が障害別、性別にかかわらず上位を占めている(総務省 情報通信政策研究所、2012)。知りたいことを調べる方法の一つとして、インターネット上のQ&Aサイトで質問を投稿し見知らぬ人から回答を得るユーザー生成メディア(CGM: Consumer generated media)がある。「Yahoo知恵袋」はそのCGMの一つで、利用者同士が知恵を出し合う互助の場として機能している。外出への制約が多い障がい者の場合、障害に関する集合知はインターネットに蓄積されている可能性が高いが、CGMの内容まで踏み込んだ研究はこれまでなかった。

・超高齢化社会のわが国において、近年“エイジング・イン・プレイス(AIP): 住み慣れた地域で(たとえ要介護状態になっても)豊かに年を重ねる”という言葉がよく聞かれる。エイジング・イン・プレイスは「地域包括ケア」や「アクティブ・エイジング(活動的な高齢化)」のコアとなる概念のひとつである(厚生労働省、2014)。地域生活を長年行っている障がい者たちは、試行錯誤しながらコミュニティで「障害との共生」を実践してきたAIPの先駆者たちと言えるが、障がい者からAIPの秘訣を学ぶ、という発想はこれまでなかったため、本研究を実施した。

2. 研究の目的

本研究では地域で暮らす障がい者(特に重度身体障がい者)の“エイジング・イン・プレイス(Aging in place: 「住み慣れた地域で豊かに年を重ねる」)”に関する知恵や工夫を以下のミクストメソッド方法で調査した。

1. インターネットQ&Aサイト「Yahoo知恵袋」に投稿された障害当事者たちによる生活や暮らしに関する質問・回答内容を計量テキスト分析によって、障害を持ちながら生活する「集合知」を量的に調査する。
2. 地域で暮らす障害当事者たちの“エイジング・イン・プレイス(Aging in place: AIP)”の工夫や知恵をインタビューを通して質的に調査する。

3. 研究の方法

本研究では、質的調査と量的調査を交互に組み合わせ妥当性を高めるミクストメソッド方法(混合研究法)を用いた。

4. 研究成果

当初の予定としては、Yahoo知恵袋データを使用する予定だったが、内容を確認してみると、高齢化についての投稿がほとんどなかったため、インタビューに加えて、脊損者にアンケート調査を行い、最終年度では、特に加齢やエイジングインプレイスに深い関連がある、二次障害やピアサポートについて着目し、インタビューやアンケート結果をまとめた。

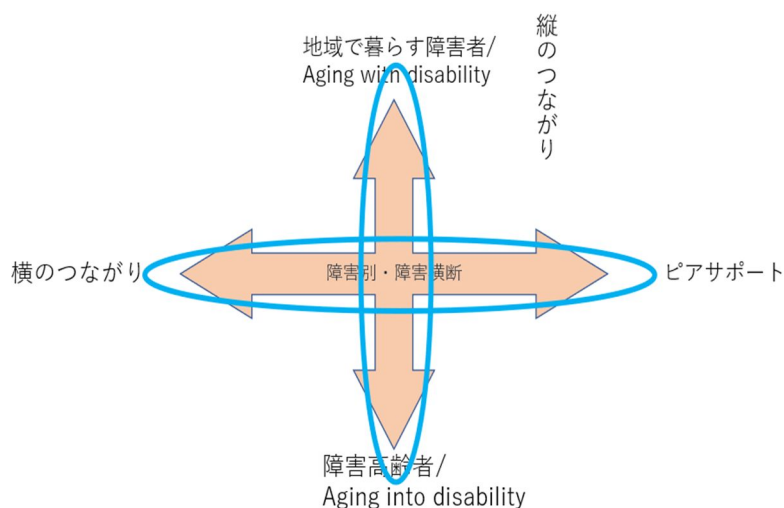
研究協力者の背景は、男性が80.2%、年齢の平均値は61.7歳、受傷後経過年数は30.4年、受傷部位は、頸髄432名(47.9%)、胸髄351名(39.0%)、腰髄118名(2.8%)、麻痺の状態は四肢麻痺433名(48.2%)、対麻痺465名(51.8%)であった。アンケート結果から、エイジングが障害のためより早く感じられる二次障害に対する知識は、「具体的な内容まで知っている」が15.4%、「言葉は聞いたことがあるが、内容までは知らない」が38.9%、「よく知らない」が45.7%と半数近くを占めた。また「二次障害があると思う」と回答した人は、52.1%であった。

また、ピアサポートに関しては、排泄管理の指導・アドバイスにおいて(食事や水分補給、活動レベル、薬物治療、排泄ケア、排泄用具使い方、失禁時の対応の仕方、その他)、すべての項目でピアを含めた非医療職より医療専門職から指導やアドバイスを多く受けていることが分かった。一方で非専門職との医学的知識量の違いが出やすい「薬物治療」に対し、実践的な対応が求められる「失禁時の対応」ではその割合の差の大きさはかなり異なっており、求める情報の違いによって相談する相手を選択している可能性を検討するため、非医療者からのアドバイスに焦点を当てて「失禁時の対応」と比較した二次解析を行った。

結果として「失禁時の対応の仕方」はほかの項目と比較して、非医療者からのアドバイスの割合が多く、実践的な情報に関しては非医療者を相談者として選択していることが明らかになった。また有意差はなかったが「食事や水分」「活動レベル」「排泄ケア」の点推定値や95%信頼区間は概ね似ており、「薬物治療」や「排泄用具の使い方」と比べると、非医療者に相談する傾向があるといえる。一方で、だれにも排泄管理について指導やアドバイスを受けていない人たちも一定数いることがわかった。

次にインタビュー調査から、「横のつながり」と「縦のつながり」が抽出され(概念図)、ピアのコミュニケーションを通じて障がい者同士の「横の」実践知を形成していることが明らかになった。加えてこれから高齢になって障害をもつ障害高齢者たちに対して、介助してもらった経験を(障害を持つ前に)する、介助のされ方、介助者との付き合い方、「迷惑をかけない」教(健常者が持つ「迷惑をかける」ことへの恐れ・嫌悪感)に気づく、などのアドバイスが語られた。以下にインタビューデータから各テーマについて、抜粋する。

概念図：
「縦横」無尽のピアサポート実践知



【介助してもらった経験を(障害を持つ前に)する】

常々私は「絶対にみんな健常者

の頃から、今から人にそうやって介助してもらった体験をしておいたほうがいいって」って結構いうんです。

【介助のされ方】

A:通り歩いてて、段差乗り越えられなきゃ手伝ってって言うし、お店で何か困れば「おぼん貸して。食べやすくなるから」とか。何でも頼むよ。その場で。

Q:そのとき、頼みやすい人って何となくいますか？ 道端で。

A:それはだいたい彼女連れて歩いている男性はカッコいいとこ見せたいから必ず手伝うし、とか。そういう合理的な観察能力じゃないか。

Q:1人じゃなくて誰かと連れ立ってる人のほうが頼みやすい。

A:うん、そりゃそうだ。

【介助者との付き合い方】

A:ヘルパーは女中さんじゃないってことだよな。人格、人権を尊重して、お願いしないといけな
いってことが1つだよな・・・関係性を維持しながら、使っていくっていうふうなことが必要なんだ
けど。そういうコツをなかなかつかむまである意味時間がかかるよね・・・向こうが気付いて先回りし
てしてくれるのもいるけど、先回りは止めてくれて頼んだりもする。明快に相手に自分の意思を
伝えるっていうのやってかないと、破綻するよな。

【「迷惑をかけない」教(健常者が持つ「迷惑をかける」ことへの恐れ・嫌悪感)に気づく】

A: 健常者のときほど結構強かったと思うんですね、「人に迷惑を掛けたらあかん」っていうこと...。
(障害を持ち)自立生活を始める前は...障害学界隈のことは、何年かいろいろ目にしたり読んだり
調べたりはしていた...。多分そっちの(障害学が提唱している)生き方のほうがいいなって.....健
常者の頃「人のお世話になることはもうダメだ、迷惑をかけてはダメだ」って感じで障害をもって生き
るのは本当に無理やわってたいぶ思っていた

「医療専門家」というと、大学で学位を取得したり専門機関でトレーニングを受けたりした専門知
識を有した人たちを思い浮かべ、患者や障害当事者たちは、通常医療の消費者、サービスの受益
者と考えられている。しかし長年障害と共生しながら地域で暮らしている障がい者たちは、AIPの先
駆者として「実践知」を蓄えており、これから高齢になって障害をもつ高齢障がい者に対して、多く
の示唆を与え得る可能性が示唆された。

今後については、医療者とピアサポーターが担うケア役割の仕組みや違いについての研究、あ
るいはピアが入ったケアチームのコミュニケーションについての研究が考えられる。また保健医療
分野でのピアサポートと教育といった多領域でのピアサポートとの比較調査は、ピアサポートの汎
用性や共通項を明らかにできるだろう。さらにこれまで暗黙知とされてきたピアサポートの実践知に
ついて明示化し深める必要がある。厚生労働省は同病者によるピアサポートを障害福祉分野に取
り入れようと、令和3年度からピアサポート体制加算が新設された。ピアサポーターの役割を明らか
にすることで、医療現場におけるピアによるサポートの更なる広がりが期待できる。

日本のみならず世界が高齢化へ向かっている中、これまでは「高齢期になって障害をもつ」人口
(障がい高齢者)に注目がされがちだった。しかし医療技術の発達などから「障害を持ちながら高
齢期を迎える人たち」(高齢障がい者)も増えてきている。近年、エイジングプレイスという言葉が使
われるようになったが、その言葉が作られる前から、障害があっても地域で暮らす人たちは、「要介
護状態になっても地域で豊かに暮らす」工夫を重ねてきている。彼ら・彼女たちからエイジングプレ
イスの秘訣を学び、社会のリソースとすることが本研究の社会的意義といえる。

本研究の成果は、論文(8本)、分担執筆図書(3本)、発表(13本、うち招待講演6本)で報告され
た(予定含む)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 岩隈美穂, 大濱眞, 加藤真介	4. 巻 37
2. 論文標題 「脊損者のアンケート回答手段と背景との関連についての報告」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本脊髄障害医学会誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩隈美穂, 大濱眞, 加藤真介	4. 巻 37
2. 論文標題 「脊損者の再生医療での改善希望と便失禁についての報告：アンケート調査による第1報」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本脊髄障害医学会誌	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Cervantee E.K. Wild, Maria Ines Gandolfo Conceicao, Miho Iwakuma, Sasha Lewis-Jackson, Rie Toyomoto, Alicia Regina Navarro Dias de Souza, Vinita Mahtani-Chugani, Rika Sakuma Sato, Tanvi Raj,	4. 巻 Volume 4
2. 論文標題 Perceptions of government guidance and citizen responses during the COVID-19 pandemic: A cross-country analysis	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Qualitative Research in Health	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.ssmqr.2023.100308	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩隈美穂	4. 巻 28(2)
2. 論文標題 「障害とともに年を取ること、年を取って障害とともにいけること」	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 老年看護	6. 最初と最後の頁 9-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Sakai, E., Yamada, T., Funaki, T., Iwakuma, M., et al.	4. 巻 14(3)
2. 論文標題 Fundamental knowledge taught in compulsory education for effective genetic counseling: a qualitative study of descriptions in textbooks	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 J Community Genet	6. 最初と最後の頁 263-274
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s12687-023-00641-3	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩隈美穂	4. 巻 32
2. 論文標題 障害当事者とのコミュニケーション：社会のリソースとしての実践知を生かす	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 コミュニケーション研究者会議プロシーディングス	6. 最初と最後の頁 63 - 73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩隈美穂, 大濱眞, 加藤真介	4. 巻 36
2. 論文標題 損傷者の身体の悩みの内容と行政への期待についての報告：第一報．	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本脊髄障害医学会誌	6. 最初と最後の頁 180-181
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩隈美穂, 大濱眞, 加藤真介	4. 巻 36
2. 論文標題 脊髄損傷者の身体の悩みと3つの時間軸との関連についての報告：第2報．	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本脊髄障害医学会誌	6. 最初と最後の頁 182-184
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Miho Iwakuma, Takuya Aoki, and Mariko Morishita	4. 巻 23
2. 論文標題 Patient experience (PX) among individuals with disabilities in Japan: a mixed-methods study.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 BMC Primary Care	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Morishita, Mariko; Iwakuma, Miho.	4. 巻 -
2. 論文標題 Diffusion of Innovations from the West and Their Influences on Medical Education in Japan.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Oxford Research Encyclopedia of Communication	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 上野悦子・岩隈美穂	4. 巻 51
2. 論文標題 地域共生社会の人材育成とSDH教育に活用可能な「地域に根差したインクルーシブな開発」 (Community-based Inclusive Development: CBID) の概念とその応用例の紹介	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 医学教育	6. 最初と最後の頁 669 - 677
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Iwakuma, M., Miyamoto, K., & Murata, J.	4. 巻 67
2. 論文標題 Changes in perceptions of Japanese university students toward disability: A mixed methods study.	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 International Journal of Disability, Development & Education	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/1034912X.2020.1865521	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩隈美穂	4. 巻 12
2. 論文標題 障害学・当事者研究から見た隠れたカリキュラムとIPE・IPW	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 保健医療福祉連携	6. 最初と最後の頁 96 104
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件 (うち招待講演 8件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 Iwakuma, Miho
2. 発表標題 The association between socio-psychological influences and fecal incontinence among Japanese people with spinal cord injury.
3. 学会等名 International Spinal Cord Society (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 岩隈美穂
2. 発表標題 「ピアのチカラ：新しい協働・連携パートナーの可能性」
3. 学会等名 第8回臨地実習協働運営交流会 (招待講演)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 岩隈美穂
2. 発表標題 「医療“専門家”としての当事者たち：専門知と実践知の融合を目指して」
3. 学会等名 第3回日本メディカルコミュニケーション学会学術集会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩隈美穂
2. 発表標題 「障害とともに年を取ること、年を取って障害とともにいけること」
3. 学会等名 日本老年看護学会第28回学術集会教育講演（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩隈美穂
2. 発表標題 「脊損者の排泄について」
3. 学会等名 全国脊髄損傷者連合会 第22回定時総会 福岡県大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩隈美穂
2. 発表標題 「障害当事者とのコミュニケーション：社会のリソースとしての実践知を生かす」
3. 学会等名 コミュニケーション研究者会議（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩隈美穂、大濱眞、加藤真介
2. 発表標題 「脊損者の再生医療での改善希望と便失禁についての報告：アンケート調査による第1報」
3. 学会等名 第58回日本脊髄障害医学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩隈美穂、大濱眞、加藤真介
2. 発表標題 「脊損者のアンケート回答手段と背景との関連についての報告：アンケート調査による第2報」
3. 学会等名 第58回日本脊髄障害医学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岩隈美穂、大濱眞、加藤真介
2. 発表標題 脊髄損傷者の身体の悩みの内容と行政への期待についての報告：第一報。
3. 学会等名 日本脊髄障害医学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩隈美穂、大濱眞、加藤真介
2. 発表標題 脊髄損傷者の身体の悩みと3つの時間軸との関連についての報告：第2報。
3. 学会等名 日本脊髄障害医学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩隈美穂、舟木友美
2. 発表標題 発達障害者支援法から10年：計量テキスト分析によるQ&Aサイトに投稿された発達障害に関する投稿内容の比較
3. 学会等名 社会医学学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩隈美穂, 舟木友美
2. 発表標題 ユーザー生成メディアにおける「障害」に関する情報探索研究 Yahoo知恵袋投稿の計量テキスト分析
3. 学会等名 第35回日本保健医療行動科学会学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩隈美穂
2. 発表標題 (異)文化コミュニケーションとしての障害
3. 学会等名 第12回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩隈美穂
2. 発表標題 コミュニケーション学と障害学からみた発達障害学生修学と支援
3. 学会等名 一般社団法人産業精神保健研究機構研究会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Iwakuma, M.
2. 発表標題 Patient Experience of Japanese people with Disabilities.
3. 学会等名 WONCA APR Conference 2019(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩隈美穂
2. 発表標題 障がい当事者は高齢化や高齢化研究についてどう考えているか、についての質的研究
3. 学会等名 第10回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岩隈美穂
2. 発表標題 障害者的高齢化：ダイバーシティ&インクルージョン
3. 学会等名 第一回日本ソーシャル・イノベーション学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩隈美穂
2. 発表標題 障害者的高齢化について：障害当事者に聞くAging in place
3. 学会等名 第41回総合リハビリテーション研究大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岩隈美穂
2. 発表標題 「障がい当事者は高齢化や高齢化研究についてどう考えているか、についての質的研究」
3. 学会等名 第10回日本プライマリ・ケア連合学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Miho Iwakuma
2. 発表標題 Patient Experience of Japanese people with Disabilities
3. 学会等名 WONCA 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 岩隈美穂 (分担執筆)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ミネルヴァ出版	5. 総ページ数 2
3. 書名 よくわかるヘルスコミュニケーション (「ピアサポート」)	

1. 著者名 岩隈美穂 (分担執筆)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ミネルヴァ出版	5. 総ページ数 2
3. 書名 よくわかるヘルスコミュニケーション (「障害者は障害を持つ人か」)	

1. 著者名 岩隈美穂 (分担執筆)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 ミネルヴァ出版	5. 総ページ数 2
3. 書名 よくわかるヘルスコミュニケーション (「高齢化する障害者」)	

1. 著者名 岩隈美穂（分担著者）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 14
3. 書名 障害者は障害をもつ人か？：「障害」に関する三つの話. In 『知のスイッチ 「障害」からはじまるリベラルアーツ』	

1. 著者名 岩隈美穂（分担著者）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 13
3. 書名 『知のスイッチ 「障害」からはじまるリベラルアーツ』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

京都大学医学研究科 医学コミュニケーション学 新着情報 https://medcomm.jp/
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------